

日本人会の 社会貢献 活動Ⅲ

○特集

シーカー・
アジア財団 | チャンタミット社



シーカー・
アジア財団
SIKKHA ASIA
FOUNDATION

■日本人会の支援

文化交流ワークキャンプと

図書・コンピュータ購入費

13万4400バーツを寄付。

シーカー・アジア財団国際部

山田大貴

タイの子どもの教育支援活動

シーカー・アジア財団は、バンコクにあるタイ国内最大規模のクロントイ・スラムに事務所を置き、主にタイの子どもたちへの教育支援活動を行っているボランティア団体です。1979年にカンボジア難民救済で設立された曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）から1981年12月に曹洞宗ボランティア会、現在の公益社団法人シーカー国際ボランティア会に引き継がれた団体のバンコク事務所として1991年まで活動しました。その後、同年9月にタイの現地法人となり現在に至ります。

タイは「中進国」と呼ばれ、バンコクでは華やかな都市の生活がありますが、階層間・地域間で大きな格差が存在しています。バンコク郊外合わせて約2000カ所のスラムが存在し、タイ最大のスラムであるクロントイ・スラムには約10万人が暮

文化交流ワークキャンプ。バンコク、ターク県、パヤオ県から学生が集結

昨年8月号の特集に続き、
タイ国日本人会が支援する
タイの福祉団体を紹介します。
今回はシーカー・アジア財団と
チャンタミット社からの報告です。
毎年恒例の
日本人会チャリティーバザー！

その純益金がタイ社会のために 役立てられています。



らすといわれています。一方、国境付近では電気が通っていないという村も多く、少数民族の子どもたちはろうそくを灯して宿題をしているという状況もあります。ASEANの背景を受けて、タイへ出稼ぎに来る移民労働者の子どもたちが置かれる教育環境は厳しい状況にあります。同じタイで暮らしながら、子どもたちの教育の機会は決して平等とはいえません。私たちは、タイ社会の下層に置かれながらも精一杯頑張る子どもたちの小さな背中をそっと押し、教育の力で貧困の連鎖を断ち切るために、図書館事業、移動図書館事業、奨学金事業、学生寮事業、保育園事業などを行っています。

文化交流ワークショップ開催！

8月10日から13日にかけて私たちが運営するシャンティ学生寮(タイ北部パヤオ県ポン郡)にてワークショップを実施しました。集まったのは、バンコクのスラム地区とターク県・パヤオ県の少数民族居住地域で暮らす中高生86人で、学生たちは皆、

シーカー・アジア財団の奨学金を受けています。このキャンプは、奨学生同士が地域や年齢を越えて交流することを目的として企画され、タイ国日本人会の皆さまからのご支援により、第2回目の開催が実現しました。

キャンプは10日の夜から始まりました。今年のワークショップは4チーム対抗で様々なレクリエーションを実施するので、そのチーム分けを受付時に行いました。参加者全員で夕食を食べた後、広間にて最初の活動を行いました。自己紹介とキャンプ中のバディを決めるくじ引きの後、近隣の病院から医師をお招きし、学生たちへ救急処置についての講習を実施していただきました。学生たちは人形を用いて人工呼吸や心臓マッサージを行い、救急法について学びました。

2日目は、学生寮の田圃で田植えを行いました。田植えの経験がない学生が半数を占めているため、各グループに農作業を日常的に行なっている寮生を均等に配置し、初心者をサポートができるようにしました。学生

たちは、滑りやすく足場の悪い田圃での作業に四苦八苦しつつも、互いに協力して順調に田植えをしていました。一日を通して共同作業を行ったことで、学生たちの距離は一気に縮まりました。

3日目は、老朽化した学生寮の建物のペンキ塗りを朝から昼過ぎまで行いました。寮生たちはもちろん、他の参加者たちも自分たちが宿泊し利用しているため、一生懸命作業に取り組んでいました。

終了後には近くの小学校にある運動場を借りて、サッカーの試合とタイの伝統的な遊びをチーム対抗で実施しました。途中で雨が降ってきましたが、学生たちははずぶ濡れになりながらも競技に夢中でした。また、この日の夜に行ったレクリエーションでは各地域の伝統文化の発表会が行われ、平地タイ、北タイのモン族、タイ北西部のカレン族が交流する貴重な機会となりました。

最後に、8月12日がタイの母の日ということもあり、学生た

ちは、母親、そして家族への感謝の気持ちを込めてお祈りをしました。家族のことを思い浮かべて思わず涙を流す学生もいました。そして、最終日の朝の閉会式で学生たちに修了証書が授与され、3泊4日のキャンプは終了しました。

参加者からは、「田植えは私たちにとって、とても大切だと思いました。なぜなら私たちは毎日お米を食べるからです。田植えの仕方を身につければ一生の武器になります」「自分の民族アイデンティティーを人前で発表できるようになったことは、これからの生活に役立つと思います」といった声を聞くことができました。

奨学生たちへ貴重な機会を提供していただき誠にありがとうございます。なお、貴会の皆さまからいただいたご支援は、バンコクとターク県・パヤオ県の各村から学生寮までの往復の移動費、ペンキと道具の購入代、食事代として大切に使用させていただきますました。また、学生寮の学習環境改善費として図書室の新書40冊とコンピュータ2台を購入させていただきました。改めて、タイ国日本人会の皆さまからの温かいご支援に心より御礼申し上げます。



チャントミット社

Beular Land Service Foundation

■日本人会の支援
 第15回タイ国青少年
 ワークキャンプの費用
 2万9000バーツを寄付。

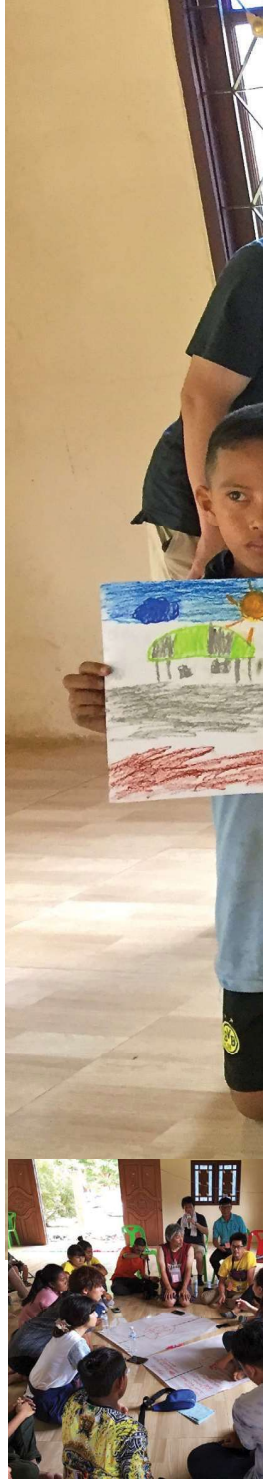
チャントミット社協力者
 阿部春代

ハンセン病を病んだ人々と
 その家族のためのNGO

この会報誌クルンテープにタイ国青少年ワークキャンプを紹介する機会を得て3回目になります。チャントミット社は、タイ国のハンセン病を病んだ人々とその家族の真の友となることを目的とするキリスト教のNGOです。30数年前から活動が始まり、ハンセン病を病んだ人の子弟が教育の機会に恵まれないことをふまえ、この子どもたちの保育所を開き、奨学金活動へと発展してきました。そして、20年前に日本人会から、保育所施設の改善費をご支援いただいたのが日本人会とのつながりの始まりです。

年1回のワークキャンプ

タイ国青少年ワークキャンプは、2005年から上記の奨学生を対象に、ハンセン病問題を正しく理解する場、また地域の



青年リーダーを育てる目的で始まりました。初回は日本の青少年10名も参加し100名近い参加者でしたが、回を重ねる中で徐々に相応しい人数とプログラムが整ってきました。5回目からはオーストラリア人が加わり、今年はラオスからの参加者4名を迎えました。因みに、これまで15回の参加者状況を見ると、キャンパーの数はタイ人355名、日本人96名、オーストラリア人79名、ラオス人4名の総数が534名(総延べ数1187名)で、各回の参加者の平均79名、参加回数平均3.3回でした。

2019年第15回ワークキャンプは8月11~13日、スリン県プサート郡クムラーチャプラチャールアムジャイ村で開催しました。キャンパーはタイ人49名、日本人15名、オーストラリア人15名、ラオス人4名の総勢83名(初参加37名)で、各自が参加費を納めます。

日本・オーストラリア・ラオスは前日夜に会場入り、タイ人の多くは当日朝に到着でした。

7時の朝食から2泊3日目の15時半まで男女別2カ所の宿舎で寝食を共にし、朝5時半から夜9時までの共同生活です。オリエンテーションから開会式、そして評価の時間と閉会式までの間に、労働だけでなく、ハンセン病に関する学び・レクレーション・分かち合い等があり、すべてのプログラムを色別の3チームで分担して行動します。

今年の主題は「チャレンジ」

これまでのキャンプで、毎回のように素人の若者たちでコンクリート張りをしてきましたが、今回は村の道路(幅5メートル、長さ60メートル、厚さ15センチの公道)の舗装工事です。工事面積が最大だけでなく、質も問われます。その困難さから、主題を『チャレンジ』としました。キャンパーの建築関係者を主にコンクリート混合を明示し、予想時間内はどう仕上げするか、緻密な計画と役割分担でキャンプに臨みました。もちろん住民の協働があり、コンクリートミキサー2台と手捏ね桶3

個での作業でした。他に、ハンセン病の後遺症を抱えた人の状況を学ぶ目的の高齢者宅掃除2カ所を、総労働時間15時間で終了しました。会場の掃除や食器洗いは言うまでもありません。

昨年からキャンプ経験者の青年実行委員がチームリーダーに担当し一層キャンパーへの具体的な働きかけが細やかで、皆が懸命に役目を果たしたと言えます。それだけに道路完成の喜びは特別で皆の笑顔が満足げに見えました。

助け合って生きようとする若者を育てたい

しかし、2か月後の日本での日本キャンパーとの合同リユニオンで、総リーダーのサククチャイ理事は「私は何が足りないと感じる」と言い、続けて「ロボットの仕事かな?」と放言し、驚きました。彼は、各自

が完成させるというゴールに没頭し役割を担い合ったが、キャンパー自らが喜びながら互いに協力をし合う生き生きとした姿が薄れたと感じたようです。

彼は「約10回頃までの各回のキャンプ評価を、あまり考えずに『楽しかった、いい、良かった』の一言で終わってきた。それはタイ人のあまり深く考えようとしないうことによるものだが、何を目的としたものであるかを考えなければいけない」と話しています。同時に彼の中には、村の何かを作る・植樹・草刈りをするとかではなく、互いに助け合って生きようとする若者を育てたいという姿勢が芽生えていました。ですから、いつも先に仲間

の希望を聞き、自主性を重んじてどのようなことが可能なかを、皆に問い続けてきました。年1回のワークキャンプは、15年の年月をかけて、タイ人自らタイ人に合ったワークキャンプの形が整いだしたのです。次回からは、目に見える外のものだけでなく各自の内面に目を向けるようなワークキャンプ、これまでの歩みを一段上るワークキャンプを目指すことになるだろうと夢が膨らんでいます。

最後に、長年チャンタミット社をご支援くださるタイ国日本人会会員の皆様に心から感謝を申し上げます。

(公益社団法人好善社 タイ国派 遣看護師)